

THE WEEKLY NEWS OF FUTTSU-CHUO

人類に奉仕するロータリー
Rotary Serving Humanity



活動するロータリー
Rotary Acting

国際ロータリー会長 ジョン F. ジャーム 2016～2017 富津中央RC会長 榎本 守男
国際ロータリー 第 2790 地区 富津中央ロータリークラブ 創立:1966/10/13 加盟承認:1966/12/12
RI D2790 FUTTSU-CHUO ROTARY CLUB Organized : Oct./13/1966 Chartered : Dec./12/1966

No.2462 第16回例会 2016. 11. 24 雨

点 鐘：榎本 守男 会長
進 行：栗原 典子 副SAA
ソング：我らの生業
お客様：栗原 克榮 様

会長挨拶

榎本 守男 会長



皆さんこんにちは。まず、お客様の紹介をさせていただきます。本日卓話をお願いしました栗原克榮様です。お忙しい中来ていただき有難うございます。限られた時間ですけれどもよろしくお願い致します。

今日は天気予報の通り初雪が降りました。11月の突然の雪で交通が混乱しています。この時期ですと冬タイヤへの交換がまだしていない人が多いのではないのでしょうか。石井会員や私どものような物流業者も例年ですと1月の雪に備えて12月中旬に交換作業しています。会員の皆様もこの季節の運転は気を付けてください。

私としては創立50周年の記念行事がすべて終わって、年度がすっかり終わったような錯覚です。こ

の症状が俗にいう燃え尽き症候群なのでしょうか。

一方嘉義と交流の LINE では嘉義南区社友からの熱いメッセージがいっぱいアップされています。

①富津中央と嘉義南区の友情は永遠。②歓迎会での熱い交流。③会長の台湾語での挨拶に感動。④三枝会員の漢詩に感動。⑤熱情招待。⑥台湾の小旗を振ってのお迎え見送りのもてなし。等々

嘉義南区扶輪社の会報にも同様の記事が掲載されています。

私も来年は必ず大勢で嘉義南区扶輪社を訪問すると約束をしました。日程が決まったらご参加よろしく願います。

創立50周年事業最後の仕事は礼状の発送です。礼状は4タイプ用意しました。嘉義南区用、塩山用、式典出席者用、式典欠席者用です。早速投函したいと思います。これから年末まで例会以外の各種の行事が詰まっています。是非メモをして忘れないようご出席ください。

11月25日 麗ちゃんにて50周年の慰労会

12月 1日 指名委員会 歴代会長経験者
18:30～ いちかわ旅館

12月 3日 富津シティRC25周年記念式典参加
出席者22名

12月11日 50周年慰労会 女子会含む会員

12月15日 例会フォーラム・年次総会 分区忘年会

12月22日 年末最終例会・家族忘年会

18時点鐘 家族及び会員全員

〒293-0043 富津市岩瀬 841-3
いち川旅館 Ichikawa ryokan
841-3 Iwase Futtsu-shi Chiba-ken,
Tel. 0439-65-0177 Fax. 0439-65-0178
URL <http://www.futtsuchuo-rotary.org>
Mail home@futtsuchuo-rotary.org



この後は卓話になります。よろしくお願いします。

幹事報告

渡辺 哲夫 幹事



1. ロータリー財団100周年記念シンポジウムに合わせた公共イメージ向上企画協力金のお礼が来ております。(回覧)
2. 連絡事項
 - ① 例会終了後IM実行準備委員会を行います。
 - ② 嘉義南 RC からお土産を未だ頂いていない方は帰りに忘れないようお持ち帰り願います。

お客様紹介

若鍋 武良 会員



講師の栗原克榮さんは東北大学大学院を卒業後、千葉県内高校の日本史の教員を務め、その傍ら各所に歴史講座の講師として活躍されてこられました。現在は教員生活を終え、「新編木更津市史」の編集や地元テレビの歴史番組への出演、公民館などでの歴史講座を担当されております。著書として『君津の歴史たんぼう』『木更津・君津・富津・袖ヶ浦の今昔』、他に山川出版の『千葉県の歴史散歩』(共同執筆)等があります。

卓話

富津を訪れた文人など

栗原 克榮 様



源頼朝(1147-1199) 鎌倉幕府初代征夷大将軍

源義経とその主従を中心に書いた軍記物語の「義経記」には、源頼朝主従の北上を「安房と上総の堺なる津くし海の渡りをして、上総国讚岐の枝浜を馳せ急がせ給いて磯が崎をうち通りて篠部いかひ尻と言う所に着き給う。」と記している。「津くし海」は百首、「讚岐の枝浜」笹毛、八幡の海岸「磯が崎」は磯根海岸、「篠部」は篠部に推定されている。

宗尊親王(1242-1274) 鎌倉幕府最初の皇族将軍
後嵯峨天皇の皇子

鎌倉幕府第6代将軍として関東に下った親王はこれより約14年間鎌倉将軍として過ごした。この間、富津地方を巡回したことは、「廻国雑記」にも記されている。巡回の途中で立ち寄った吾妻が丘で、親王が大和の吉野山をしのんで吉野の桜樹を移し植え、また吉野山金峰山寺の本尊「金峰山寺の蔵王権現」を迎えたことから、吾妻神社のある丘陵地帯を吉野郷と呼ぶようになった。

道興(1430-1527) 左大臣近衛房嗣の子で聖護院門跡などを務めた。

文明18年(1486)の6月から約10か月間、関東各地を巡り、東海、東北へも足を延ばし、紀行文「廻国雑記」(1486)にまとめた。その中で「鹿野山」や「吉野」「鋸山」を記している。

雄誉靈巖上人(1554-1641) 江戸前期の浄土宗の僧、知恩院三十二世

一説には富津市佐貫に生まれたともいわれている。13歳から21歳まで佐貫の大坪山の麓で修行した。その後、下総の大巖寺で研修を続け、近畿各地を巡歴して再び佐貫を訪れ、城主内藤政長らの

帰依を受け、富津では湊の湊濟寺、金谷の本覚寺、富津の大乗寺などの創建または再興に尽くし、佐貫の勝隆寺の住職としても活躍した。

水戸光圀(1628-1701) 水戸藩の第2代藩主
いわゆる「水戸黄門」

光圀が延宝2年(1674)、47歳の時、水戸から房総を経て、鎌倉へ行き、祖母英勝院の墓に詣で、江戸へ帰ったときの紀行文「甲寅紀行」を著した。4月22日水戸を発し、28日奈良輪、木更津を経て、湊に泊まり、29日舟で勝山まで行き、馬で保田、金谷、萩生、百首村を過ぎ湊に泊まる。5月2日湊から舟に乗り、対岸の金沢に上陸し、陸路鎌倉に入り、祖母の墓参を済ませて、9日に江戸小石川の水戸邸に帰った。

松平定信(1759-1829) 江戸中期の大名、老中、
陸奥白河藩3代藩主

定信は、寛政3年(1793)から海防のため江戸湾沿海を視察した。その後、白河藩は竹岡の百首などに台場を築いて警備にあたった。竹岡の薬王寺のオハツキイチョウは、文化9年(1812)に定信が領国白河より取り寄せ手植えしたと伝えられている。

伊能忠敬(1745-1818) 地理学者、測量家

忠敬は、幕府の命で寛政12年(1800)から全国を測量して、日本沿海地図の作製に当たった。「伊能忠敬沿海日記」によれば、忠敬が富津市内の沿岸を測量したのは享和元年(1801)6月24日～26日の3日間である。金谷での測量は次のように記している。「六月二十六日、朝より晴れ。六ツ半前(午前7時)湊村出。百首村、萩生村、金谷村八ツ半(午後3時)着。止宿。名主鈴木四郎右衛門。夜、晴天、測量。」

谷文晁(1763-1841) 江戸時代後期の日本の画家

文晁は、30歳ごろまで日本全国をくまなく旅して、各地の山を写生している。「日本名山図会」には、「鉅山(鋸山)」、「加納山(鹿野山)」が描かれている。

小林一茶(1773-1829) 江戸時代の代表的俳諧師

一茶は、江戸在住時にはしばしば各地を俳諧行脚しているが、とりわけ、上総への巡歴は十数回に及び、木更津や富津、金谷、鋸南を訪れ、金谷の華蔵院に14回も訪れた。また、「七番日記」には織

本花嬌に関する記録が多くあり、文化7年(1810)に花嬌が没するまでの間に何度も訪ねていた。

歌川広重(1797-1858) 江戸時代末期の浮世絵師

風景画で知られる広重は、作画の取材を兼ねてよく旅をしていた。天保15年(1844)と嘉永5年(1852)の2回、房総を訪れている。2回目は、安房誕生寺や清澄寺などを訪れた帰りに、那古、勝山を経由して金谷に到着している。「鋸山」「天神山海岸」「鹿野山鳥居崎」を描いた浮世絵を残している。

内村鑑三(1861-1930) キリスト教伝道者・評論家

内村は、一高教授のとき、教育勅語に対する敬礼を拒否して免職となった。その翌明治25年(1892)夏を竹岡で過ごしている。ここで天羽基督教会の教会規則を作り、教会設立式を行ったが、これは贖罪の信仰の深まりにおける転機であり、後の無教会主義者内村の教会への思いを伺うことのできる出来事だとされる。

夏目漱石(1867-1916) 明治の文豪、英文学者

第一高等中学校の2年生であった漱石は、明治22年(1889)8月学友4人と共に房総を旅した。この旅の様子を漢詩文の「木屑録」に書き表している。「こころ」で“先生”とKが旅に行く。保田、富浦、那古が登場する。

正岡子規(1867-1902) 明治の代表的俳人、歌人

漱石の紀行文「木屑録」を受け取った子規は、明治24年(1891)3月房総旅行に出発する。その紀行文「隠蓑日記」に、「日本寺から鋸山の山頂を目指した。途中、羅漢の様々な姿態を見ながら登って行った。すると、少しづつ俗世間を離れていくようであり、山頂では武蔵、相模、安房、上総、下総国が、ぐるっと見渡せ、この景観は別世界を見ているように感じた・・・」と書いている。

平福百穂(1877-1933) 日本画家、歌人、「アイヌ」

「鴨」「七面鳥」などの優れた日本画を描く百穂は、大正7年(1918)以降の7か年間、その多くの夏の季節に来津、富津海岸近くの俗称「おんせん」という旅館に滞在した。

巖谷小波(1870-1933) 日本の児童文学の基礎を

つくった児童文学者、小説家、俳人
小久保のさざ波館は昭和6年(1931)創業の際、

巖谷小波の命名によるものとされ、翌年5月に小波が同館を訪れた時に、お話し会、句会を開くなどしている。「春の海」など6句を残し、いずれも軸や額として遺されている。また、創業40周年にあたる昭和47年(1972)、当時のさざ波館主刈込碩弥氏は同館の表玄関前に「春の海潮甘かれと思ひけり」の句碑を建立した。

島崎藤村(1872-1943) 自然主義の代表的作家。

小説「破戒」「春」「家」「夜明け前」など

島崎藤村の「力餅」のなかに、「上総行き船が出るころ」「鹿野山を超えて」がある。藤村が富津から小久保にやってきたのは、明治29年(1896)と翌年の2回である。横浜から船便で富津へ、そして小久保に滞在した経験が小説「春」となり、また「力餅」となったのである。

堀辰雄(1904-1953) 小説家、代表作「聖家族」

「美しき村」「風立ちぬ」「菜穂子」

一高入学の大正10年(1921)の夏、かねて近所で親しくしていた国文学者内海弘藏一家が滞在している竹岡村を訪ねている。この避暑体験から後に「甘栗」、「麦藁帽子」が書かれる。

尾崎行雄(1858-1954) 明治、大正、昭和にわたる

政党政治家、号は罌堂

青木の浄信寺には、碑文を罌堂が書いた忠魂碑が、昭和25年(1950)に建立された。その翌年5月、罌堂は青堀町を訪れ、浄信寺の忠魂碑を詣で、記念の黒松二本を碑前に植樹の後、檀家と揃って記念撮影をした。その後、青堀町小学校講堂において、千名を超える聴衆を前に「日本の生きる道」と題して講演を行った。

土屋文明(1890-1990) 歌人、国文学者、アララギ

派の指導的存在

文明の「往還集」(昭和5年(1930))には、「上総富津海岸にて」という詞書きのある2首の作品がある。「砂よけの垣根にのこるはだら雪 砂の上の影を鮮やかにみす」、「砂丘おりてま近に見ゆる松原へ先刻の人まだ歩み居る」。文明が富津に来たのは、昭和初期と思われる。

委員会報告

50周年記念事業慰労会のお知らせ

高橋裕之 記念事業実行委員長

11月25日と12月11日に行われる慰労会について実行委員長より集合時刻、車の乗り合いについて報告がなされた。

国際奉仕委員会

石渡 鋼 国際奉仕担当部長



本年度国際大会の勧誘とお知らせをいたします。

開催場所 米国ジョージア州アトランタ

開催日 2017年6月10日～14日まで

登録料 490ドル(12月15日までは340ドル)

あの「風と共に去りぬ」の舞台でもあり「オーガスタゴルフ場」の地、マスターズは終わっていますが、この際南部の風土に浸るのもよろしいかと思えます。当クラブ只今約1名の申し込みがあり、参加ご希望の方は国際奉仕委員会にお声がけください。

ニコニコ BOX

石井輝之 親睦担当委員

若鍋武良 栗原克榮様をお迎えして

石井輝之 遅くなりましたが50周年を無事終えて

計2,000円

出席報告

栗原典子 出席担当部員

区分	会員数	出席	欠席	MUp	出席率
今回	31/28	20	5	4(3)	85.71%
前回	31/29	16	10	13(3)	100%
前々回	31/29	25	3	2(1)	93.10%

括弧内は出席規定免除者のMUp数